

外從五位下石見守麻田連陽春 一首【年五十六】

五言和下藤江守詠<sup>スル</sup> 裨叡山先考之舊禪處柳樹<sup>ヲ</sup>之作上

近江<sup>ハ</sup>惟<sup>コレ</sup>帝里  
裨<sup>ハ</sup>叡<sup>マコトニ</sup>寔<sup>ニ</sup>神山  
山<sup>ニ</sup>靜<sup>シ</sup>俗<sup>ニ</sup>塵<sup>ニ</sup>寂  
谷<sup>ニ</sup>間<sup>ニ</sup>眞<sup>ニ</sup>理<sup>ニ</sup>等  
於<sup>ア</sup>穆<sup>タリ</sup>我<sup>カ</sup>先<sup>ニ</sup>考<sup>ス</sup>  
獨<sup>ニ</sup>悟<sup>シテ</sup>闡<sup>ヒラク</sup>芳<sup>ニ</sup>緣<sup>ヲ</sup>  
寶<sup>ニ</sup>殿<sup>ニ</sup>臨<sup>テ</sup>空<sup>ニ</sup>構<sup>ハ</sup>  
梵<sup>ニ</sup>鐘<sup>ヲ</sup>入<sup>レ</sup>風<sup>ニ</sup>傳<sup>フ</sup>  
煙<sup>ニ</sup>雲<sup>ニ</sup>萬<sup>古</sup>色<sup>ナリ</sup>  
松<sup>ニ</sup>柏<sup>ニ</sup>九<sup>冬</sup>專<sup>ナリ</sup>

『日本書記』に陽春をやハルと訓ぜる處あり、萬葉にはヤスとよませあり。其の先は朝鮮人なりと云ふ。裨<sup>ハ</sup>叡<sup>マコトニ</sup>、比<sup>ハ</sup>叡<sup>マコトニ</sup>、日<sup>ハ</sup>枝<sup>ニ</sup>、皆<sup>ハ</sup>同<sup>シ</sup>じ。此の『懷風藻』の編輯成て後、三十七年、淡海三船卒して後、四年にして最澄比叡山を開く。然らば則ち傳教大師が此の山を開かざる以前より、禪菴か禪房の如きものありしならん。其の事實は杳として今尋ぬべからず。天智天皇の都し玉ふの處、大津は帝里<sup>マコトニ</sup>なり、裨<sup>ハ</sup>叡<sup>マコトニ</sup>は神山<sup>ハ</sup>なり。而して山は靜寂<sup>シヤク</sup>、谷は幽間<sup>ウツマ</sup>なり。等の字誤寫ならん、「谷間<sup>ニ</sup>シテ眞理<sup>ニ</sup>等<sup>シ</sup>」意義を成さず、攢<sup>アツマル</sup>の字を以てすれば韻字として合す。於<sup>ハ</sup>は歎詞、穆<sup>ハ</sup>は讚詞。我<sup>ハ</sup>先<sup>ニ</sup>考<sup>ス</sup>、藤江守より言へば我先考<sup>ハ</sup>なり、陽春より言へば君先考<sup>ハ</sup>ならずや。獨<sup>ハ</sup>悟<sup>ハ</sup>、眞理を獨悟したのであるか、迷妄を獨悟したのであるか、俗人外の悟りを開きたるなり。闡<sup>ヒラク</sup>芳<sup>ニ</sup>緣<sup>ヲ</sup>、法緣たらん。單に芳緣では山花を賞する意義となる。法の誤寫たる疑ひ無し。寶<sup>ニ</sup>殿<sup>ニ</sup>臨<sup>テ</sup>空<sup>ニ</sup>構<sup>ハ</sup>、是れ傳教大師の前、四十年か四十五年なるか判然せざるが、兎に角、佛殿を建築したるものなり。梵<sup>ニ</sup>鐘<sup>ヲ</sup>入<sup>レ</sup>風<sup>ニ</sup>傳<sup>フ</sup>、寺あり必ず鐘あり。煙

雲萬古色、松柏九冬專、裨叡を觀れば、煙雲が蒼奔として萬古の色を聳かし、而して松柏は鬱茂して冬も猶ほ得意なる如し。

今謂く題目に和詠柳樹作とあり。然らば柳の柳たる状を描かざるべからず。聊かも柳詠の意なく、反て松柏の事を言ふ。詠ぜんと欲する意あるも、其の意を表はすこと能はざりしならん。後賢は、題目と内容と違背せざることを推敲すべし。

日月荏苒去トシテリ

慈範獨依依

寂寞精禪處

俄爲カニ積草シ墀ト

古樹三秋落

寒草九月衰

唯餘ス兩楊樹

孝鳥朝夕悲

荏苒を匆匆とすれば、佳なるに何の故を知らず。次第次第に去るでは、急速電光の意義無し。慈範は先君子の遺戒。依依は孝子が先子の慈範を思ふて情に堪へざる形容。而して先君子が舊禪處の状は如何。寂寞して人無く、唯積草の荒涼たるあるのみ。墀は人の通行する石を敷ける庭、寺の庭が草茫茫たり。古樹三秋落、寒草九月衰、先哲曰く、「草疑ふ花の誤」余謂ふ此二句のみ、平仄整正したりとて、他句皆古詩の格、改むるの要なし。草にて意義通ず。草と花と字形大に異る、誤寫の咎無し。唯餘兩楊樹、孝鳥朝夕悲、孝鳥は鳥の一名。反哺の孝あり。反哺の養を爲さんと欲す、而かも父已に亡し。兩株の柳を看て、孝兒が思に勝へざるなり。此の篇に於て初めて柳の事出づ、前首として獨立して居る詩なれば、多少此の意味なかるべからず。惜い哉惜い哉。

外從五位下大學頭鹽屋連古麻呂 一首

春日於<sup>テ</sup>左僕射長屋王宅<sup>ノ</sup>宴<sup>ス</sup>

ト<sup>シテ</sup>居<sup>ラ</sup>傍<sup>ラ</sup>城<sup>ノ</sup>闕<sup>ニ</sup>

乘<sup>レ</sup>興<sup>ヲ</sup>引<sup>ク</sup>朝<sup>ノ</sup>冠<sup>ヲ</sup>

繁<sup>ク</sup>絃<sup>ヲ</sup>辨<sup>シ</sup>山<sup>ノ</sup>水<sup>ヲ</sup>

妙<sup>ク</sup>舞<sup>ヲ</sup>舒<sup>ク</sup>齊<sup>ニ</sup>紈<sup>ヲ</sup>

柳<sup>ノ</sup>條<sup>ノ</sup>風<sup>未<sup>レ</sup>煖</sup>

梅<sup>ノ</sup>花<sup>ノ</sup>雪<sup>猶<sup>ホ</sup>寒</sup>

放<sup>シ</sup>情<sup>ヲ</sup>良<sup>ヤ</sup>得<sup>レ</sup>所<sup>トコロ</sup>

願<sup>フ</sup>言<sup>ハ</sup>若<sup>シキ</sup>金<sup>ノ</sup>蘭<sup>ノ</sup>

此の詩に於て初めて長屋王とあり、他は一字皆略す、何の所以を知らず。朝冠、長屋王は左大臣の位高きに在り、朝冠中の朝冠なり、乘興の故に引くならん。普通なれば、整朝冠なるべし。宴會の席所謂無禮講の意味。繁絃辨山水、絃は山の曲もあらん、又水の曲もあらん、聽き得て以て辨ずるなり。妙舞舒齊紈、齊の國より出る紈、即ち白色の練絹なり。山と水と二、齊紈一、此等の句を對を成さずと云ふなり。柳條、梅花、二句早春の景色。願言は『詩經』の字、古詩に多く用ひ、近體に多く用ひず。金蘭の如き善交を我等は學ばんとなり。

從五位下上總守伊支連古麻呂 一首

五言賀三五八年宴

萬秋長貴戚  
五八表遐年  
眞率無前後  
鳴求一愚賢  
令節調黃地  
寒風變碧天  
已應蠱斯徵  
何須顧太玄

此の題目、前に上刀利宣令の詩にあり。抑も我邦にて四十を初老と稱し、宴を開き壽を爲すは、其の始或は天智以前ならんとも思はる。然るに『懷風藻』中已に二人の詩あるに於ては、天武、持統、文武、時代に盛んに之を行ひしものゝ如し、降りて百年後に淳和天皇の天長元年十一月、太上天皇、年登四十。行慶壽之禮」と『續日本紀』に在り。余考ふ、四十を以て初老と稱せば、五十は中老、六十は大老、七十は耄、八十九十は死人同様とするか。『曲禮』を案ずるに、十年を幼學と曰ひ、二十を弱冠と曰ひ、三十を壯室と曰ひ、四十を強仕と曰ひ、五十を艾と曰ひ、六十を耆と曰ひ、七十を老と曰ふ、而して八九十を耄と曰ひ、罪あるも刑を加へず。『曲禮』の説、今日より以後、五六百年間は正當の眞理として採用せらるべし。東海姬氏國の月卿雲客が、四十を初老と稱して賀するなぞ、愚劣極る所業なり。幸にして昭和の今日は、此の如き愚劣の徒、跡を絶ち、七十八にして始めて賀宴を設く。意義の存する所茲に在り。惜い哉、前世の人を喚起して、今日の事を知らしむるを得ざること。而して此の賀五十八年詩は風顛子の嚆語に類して何等解すべき道無し。

# 隱士民黑人 二首

## 五言幽棲

試出<sup>テ</sup> 罽<sup>レ</sup> 塵<sup>ル</sup> 處<sup>ヲ</sup>  
追尋 仙桂<sup>ル</sup> 叢  
巖谿 無<sup>レ</sup> 俗事<sup>レ</sup>  
山路 有<sup>リ</sup> 樵童<sup>レ</sup>  
泉石 行行 異  
風煙 處處 同<sup>シ</sup>  
欲<sup>セハ</sup> 知<sup>ラント</sup> 山人<sup>ル</sup> 樂<sup>ヲ</sup>  
松下 有<sup>リ</sup> 清風<sup>レ</sup>

民黑人は野見<sup>ル</sup> 宿禰<sup>ノ</sup> 後裔と云ふ。

罽塵は城中の事。罽は「カマビスシ」なり。仙桂叢は、山中の意味に看よ。山中は俗事無し、俗事無き處に、樵童有り。樵事は俗事にあらざるなり。泉石は城中無き處、風煙も城中には無し。而して山人の樂は如何。松下に唯清風あるのみ。此の詩は吐屬自然にして、毫も塗澤せず、幽棲の題目に背かざる作なり。山人を山客と改め、有清風を只清風と改むれば、五律の上乗なるものなり。

## 五言獨坐山中

煙霧 辭<sup>シ</sup> 塵<sup>ル</sup> 俗<sup>ヲ</sup>  
山川 壯<sup>ニ</sup> 我<sup>ニ</sup> 居<sup>ヲ</sup>  
此時 能<sup>ハ</sup> 草<sup>ヲ</sup> 賦<sup>ヲ</sup>  
風月 自<sup>ラ</sup> 輕<sup>レ</sup> 余<sup>ヲ</sup>

壯の字面白し。能草賦、賦を草するを能くせざるときは、風月の爲めに輕んぜ

らるゝとなり。奇思奇想、超凡と謂ふべし。

# 釋道融 五首

釋道融者。俗性波多氏。少遊槐市。博學多才。特善屬文。性殊端直。昔丁母憂。寄住山寺。偶見法華經。慨然歎曰。我久貧苦。未見寶珠之在衣中。周孔糟粕。安足以留意。遂脫俗累。落飾出家。精遊苦行。留心戒律。時有宣律師六帖鈔。辭義隱密。當時徒絕無披覽。法師周觀未踰浹辰。敷講莫不洞達。世讀此書。從融始也。時皇后嘉之。施絲帛三百匹。法師曰。我爲菩提。修法施耳。因茲望報。市井之事耳。遂策杖而遁。【自此以下可有五首詩云爾有疑】

槐市は學校を云ふ。丁母憂は、母の死去に會ふこと。「法華經」は五首弟子受記品に、自分の衣中に寶珠の有ることを知らず、窮子所謂乞食の羣に入て流浪したること。一たび我は乞食にあらず、長者即ち富豪の子であると知らば、周公や孔子の教は、畢竟糟粕のみ、辛苦して儒學者と爲るの要無し。是に於て出家し、經と律と論との三藏の中、特に戒律を擇んで研究する志を興せしなり。宣律師は、唐の終南山の道宜律師、世に四分律の開祖と稱す。此の律師の著はす「六帖鈔」は傳來して日尙淺し。其の書深玄、披覽する者あらず。獨法師は披覽して、未だ浹辰即ち十二日間を踰えざるに深義に洞達するを得たり。「左傳」に浹辰之間。而楚克其二都とあり。皇后は聖武天皇の皇后なり。

我 所<sup>レ</sup>思 兮 在<sup>レ</sup>無 漏<sup>ニ</sup>  
欲<sup>ニ</sup>往<sup>テ</sup>從<sup>ハント</sup>兮 貪<sup>トシ</sup>瞋<sup>シ</sup>難<sup>シ</sup>  
路<sup>ノ</sup>險 易 兮 在<sup>レ</sup>由<sup>レ</sup>己<sup>ニ</sup>  
壯 士 去<sup>テ</sup>兮 不<sup>ズ</sup>復<sup>マタ</sup>還<sup>ラ</sup>

漢の張衡に四愁詩あり、四首皆五十字を以て成る。此の詩は其の作法に倣ふて、

二十八字を作る。張曰く、我所<sup>レ</sup>思<sup>レ</sup>今<sup>レ</sup>在<sup>二</sup>泰山<sup>一</sup>。欲<sup>二</sup>征從<sup>レ</sup>之<sup>一</sup>梁父艱。又春秋の世、燕の荊卿は、風蕭蕭兮易水寒。壯士一去不<sup>二</sup>復還<sup>一</sup>と、而して今「楚辭」の作法も加へて、四句共に今の字を挾入す。良とに辣手とす。無漏<sup>、</sup>は出世間、有漏<sup>即ち</sup>世間の反對、無漏の道に向つて進まんと欲するも、貪と瞋と稱する邪魔があつて、我は艱<sup>ナヤ</sup>む。而かも路の險易は其の人の決心に在る。古の壯士は險を視ること易の如く、險に向て一進し、遂に還らず。我も佛道に向て進まんと決心して、決して本の有漏には還らずとなり。志を言はん欲するに、漢代の古調を學び、筆鋒犀利、眼中敵無し。以て其の道骨稜稜たる風を想見すべきなり。



## 從三位中納言兼中務卿石上朝臣乙麻呂 四首

石上中納言者。左大臣第三子也。地望清華。人才穎秀。雍容閒雅。甚善風儀。雖  
レ勳志典墳。亦頗愛一篇翰。嘗有朝譴。飄寓南荒。臨淵吟澤。寫心文藻。遂有  
ニ銜悲藻兩卷。今傳於世。天平年中。詔簡入唐使。元來此舉。難得其人。時  
選朝堂。無出公右。遂拜大使。衆僉悅服。爲時所推、皆此類也。然遂不  
レ往。其後授從三位中納言。自登台位。風采日新。芳猷雖遠列。蕩然時年。

## 五言飄寓南荒贈在京故友一首

遼 窶 遊 千 里  
徘徊 惜 寸 心  
風 前 蘭 送 馥  
月 後 桂 舒 陰  
斜 雁 凌 雲 響  
輕 蟬 抱 樹 吟  
相 思 知 別 慟  
徒 弄 白 雲 琴

「懷風藻」を編する者が、其の人の傳を作るは乙麻呂以外に無し、特に此の人の  
み傳を作るは、如何なる理由なるを知らず。古溪案ず。『續紀』【十三】に天平十  
一年三月庚申。石上朝臣乙麻呂、上坐<sup>ツミシテ</sup>奸<sup>スルニク</sup>久米連若賣<sup>ワカメ</sup>配<sup>カケ</sup>流土佐國。若賣配<sup>カケ</sup>下總  
國焉。萬葉中に三首の贈答あり。二首は若賣のもの一首は乙麻呂のもの戀戀たる  
情緒を見る。思ふに當時の人、その戀中に同情し、罪を得たるを悲しみ、以つて  
傳を委しくせしものか。左大臣は石上麻呂なり。門地も清華、容姿も閒雅、而し  
て五典と三墳を研究し。兼て詩文を好む。朝廷の譴斥に觸れ、南荒の地に飄寓、屈  
原の如く淵澤に沈吟し、遂に銜悲集二卷を著はす、【此の本未見】傳於世とあるか



知るの早きなり。又槐は周代盛んに賣んで、廟堂に種づるもの多く、三公の位に、三槐を喩へしてあり。特に此の樹の落葉を看て悲しむ所以なり。彈琴以て日暮の淒氣を忘れ、又月下に歩して孤獨を傷む。而して公と今日天涯に別離す。別離すと雖も、今日までの交情は違はざらんことを希ふとなり。

前首と異なり。平仄法整正せず、殊に、誰逢稀、天垂別、分後などの語は、前半四句の佳なる點を滅茶滅茶にす。必ずや久しい間の誤寫ならんと思ふなり。

五言贈舊識一首

萬里風塵別ナリ  
三冬蘭蕙衰フ  
霜花逾入鬢ニ  
寒氣益顰眉レ  
夕鴛迷霧裏ニ  
曉雁苦雲垂ルニ  
開衿期不識スレドモ  
吞恨獨傷悲テ

遠地に在る友に寄する詩。風塵別、南と北と、互に風塵を異にす。蘭蕙は、冬九十日を経て葉衰ふ。非情の物然り、有情の者如何。霜花即ち白髪か鬢上に増すのみなり。而して老人は寒氣に耐へず、寒氣に遇つて眉を顰めざるべからず。夕鴛は、霧裏即ち池中に霧が籠めて泛ぐ處に迷ふ。曉雁は、天中雲垂れて其の前路に苦しむ。開衿少し「クツロイ」で君を待てども、君は至らず。恨を吞んで傷悲する所以なり。不識は意義を爲さず。不至の誤寫たるや疑ひ無し。古溪案ず贈舊識は乙麻呂が愛姬を指すならん。

五言秋夜閨情一首

他郷頻夜夢  
談與麗人同シラス  
寢裏歡フコト如實  
驚前恨泣ク寒  
空思向桂影ニ  
獨坐聽松風ヲ  
山川嶮易路  
展轉憶フ閨中ヲ

夫が妻を憶ふ意味か、妻が夫を憶ふ意味か、又情郎が愛姫を憶ふか、愛姫が情郎を憶ふ意味か、總て明白ならず。夜夢ノの事、明白ならざるが反て明白なるものなり。此の如き詩は、解す可く、解す可らず、要するに夢中に在て讀むべきものなり。起坐して讀むべきものにあらず。古溪案ず閨情は乙麻呂が愛姫を思ふものならん。